

＜今日の説教のポイント 出エジプト記21章1～17節＞

1 生ける神様を意識した法の重視：民主主義とは違うあり方。

21章から23章の終わりまで、いわば色々な法律が記されています。ともすればすぐに個々の内容に移り、不可解な点を問題にしがちですが、まずこの全体が持つ意味を考える必要があります。今、私たちはウクライナやパレスチナの事態を前にし、「幾ら法律を作ってもだめじゃないか」と思いがちです。何が問題なのでしょう？ 今の法律とこの「契約の書」との違いは何でしょうか？ 生ける神様が強く意識されている、つまり人が皆で寄って作ったのではなく、生ける神様が命じられた法律（律法）が集められたものである点が決定的に違うのです（例：21:6, 14-15）。民主主義の重要性が叫ばれてきた時代が続きましたが、それ（人が寄って作る）だけでは危ういことを考えさせられている今の時代にとって、大事な意味を持つ個所だと思います。

2 部分から全体でなく、全体から部分を考える — 聖書の読み方。

個々の内容に移ると、確かに不可解に思える内容にぶつかります。今日の個所でも、①奴隷を認める？、②耳を刺し通す(6)、残酷、③父母を打ったり、呪っただけで死刑、厳しすぎる(15, 17)、等々。しかし、実際の状況を見無視した勝手な推測をしても意味ありませんし、聖書自体の中で（すなわち、時代が経つ中で）同じ教えが変化している場合には、そのことが持つ意味を考えることが大事です。申命記15章12節以下を見ると、奴隷に対する思いやりがずっと増えています。聖書は、その個所に書かれていることからだけ考えるのではなく、聖書全体で言わんとしていることを考えながらその個所を読む、部分からではなく全体から、点ではなく線で考える。これが大事なのです。すると見えてくることは、神様は私たちに、隣人に対する様々なあり方において、いわゆる人道主義的なあり方を求めておられる、それは主なる神様その方がそのようなお方であることから来ている、ということです（22:20以下、「人道的律法」と見出しがつけられた所を読む。ここに記された内容の要点は二つ。それが重要！）。

今の絶望的に思える（人間に対して）世界を変えることのできる希望が、確かにここ（この神様の存在と、この神様を信じて生きる人間の出現）にあるのではないのでしょうか！ 福音の宣教、大事です。